



同志社人物誌 (36)

# 末光信三

海老沢有道

## 一、はじめに

末光信三という偉大な人格を語るものとして、私ごときはふさわしい者とは決して思われない。同志社には多くの適任者がおられるはずである。が、あえて執筆をお引き受けしたのは、そうしないではいられないような、ある種の使命観のようなものを感じさせられたからである。

まず私は小学生時代に、記憶はおぼろげな

から先生の嚔咳げががに接して以来、中学生時代には学校において、また下鴨集会において薫陶を受け、さらに女子部教員となって七年間、先生の下に奉職し、毎朝の礼拝、あるいは賀茂教会の聖日ごとに、豊かな体験から出る滋味溢れる説教に耳傾け、家庭的にも親交をいただき、多くの霊的賜物を与えられ、キリスト者としての在り方を教えられた。私の生き方は先生によって影響され、決定されたといっても過言ではない。全く、私の生涯におい

て接した最も偉大な人格であり、最も敬愛した先生である。が、その柔和の中に犯し難い厳しさのある先生の前に立つ時、泰西名画で見るキリストが弟子に注がれる厳しさと愛の眼差(まなざ)しから受ける印象がほうふつとして、私ごときは到底及びもつかぬ高い人格に圧倒されるばかりで、先生の遭遇された種々のできごと、その時の先生の御感想など、到底お尋ねする勇氣を持ち得なかった。今にして思えば、そうした時、北山あたりの閑寂な小寺の一隅で、落葉を焚きながらとはいわないまでも、静かに酒でも汲みかわしながらお聞きしておけばよかったのになど、先生にはあり得ない途方もないシーンを考えたりするのである。

従ってここには歴史研究者としての私ではなく、先生の人格に傾倒した一個人人間として、先生を語ることを許して頂きたいと思

## 二、同志社来任以前

末光信三先生は同志社出身者ではない。が、誰よりも同志社を愛し、新島精神を体

し、新島先生の信仰を継承した人である。私は中学時代、デビス著『新島襄先生伝』をテキストに教えられた者ではあるが、新島襄が生きた力をもって私に迫ってくるようになったのは、新島伝の講義ではなく、末光先生の礼拝訓話・聖書と倫理の淡々とした講義を通してであった。本地垂迹的表現ではあるが、少なくとも私にとっては、まさに先生は新島精神の権化と思われるのである。

先生の略歴と回想的遺稿は永眠一周年に当たって令息力作教授が編刊された追悼文集『無不可』に収められているが、明治一八（一八八五）年十一月、愛媛県宇和郡卯之町に生まれ、長じて漱石の「坊っちゃん」で名高い松山中学校に入学した。漱石はすでに熊本に去ったあとであったが、「坊っちゃん」登場モデルたちに教えを受けた。のち同志社中学の数学教師となった弘中又一もその一人であったはずであるから、末光先生が中学長となった時、どんな出会いであったか、また松山時代の弘中評など聞き残してしまったことは残念である。

それはさて置き、明治三七（一九〇四）年九月、先生は遙か笈を負うて札幌農学校に入

学、農業経済を専攻。四三年七月、東北帝大農学部（農学校が昇格）を卒業。翌年に渡米。ヴァーモント州のミッドルバレー大学に学び、英文学・哲学を修めた。この二つの学校に学んだことは、先生の進路に決定的影響を与えたといえる。すなわち札幌農学校は、かのクラーク博士の感化により生まれた札幌バンドの佐藤昌介、宮部金吾、新渡戸稲造らが教授として母校に活躍し、ピューリタンの伝統が当時もおお生き生きと脈打っていた。そこに先生は自由・平等・友愛の精神を感じ、カーライル、ラスキンを学び、福音への眼を開かれたのであった。そして札幌バンド出身者を中心とする札幌独立教会に明治四〇年入会。教会生活を熱心続ける一方、新渡戸稲造が勤労青年のために設けたキリスト教主義による遠友夜学校を教師として援けた。こうして先生は信仰を抱き、かつカーライルを主として英文学に関心を持ち、渡米することになったのである。

ヴァーモント州はいわゆるニュー・イングランド、まさにピューリタンの本場ともいうべき所であり、その真髄に触れて先生の信仰にもとづく人格はますます磨きをかけられた

ようである。そして大正四（一九一五）年帰朝。恩師佐藤昌介の招きを受け、有島武郎の後任として予科講師に就任。翌年には弱冠三〇才で教授に任ぜられ、爾来専ら英文学を講じるようになった。一方、再び遠友夜学校を援け、また学生時代に建設に努めた北大キリスト教青年会寄宿舎に学生と共に生活。学Yの発展に尽くし、独立教会においては竹崎八十雄牧師を援けて、伝道に励んだ。実は私の父も札幌農学校出身で、学生時代、遠友夜学校を援けた先輩に当たり、かつ同志社神学校卒業後、大正二年以来、札幌組合教会牧師であったが、私の少年時代、よく「末光信三さんは立派な人だ」と話しているのを聞いたことが思い出される。

### 三、同志社来任

大正九（一九二〇）年九月、同志社総長海老名弾正の招きにより、同志社大学予科教授となり、英文学を講じた。それは英文学の中に流れるキリスト教精神を諄々と説く名講義であったと聞いている。先生が同志社の招きを受けられた動機は知らない。が、教育を通

して福音を証しようとする先生は、同志社こそ、その場であると考えたであろう。何よりも先生は少年時代からすでに新島襄の人格・信仰、そして教育精神に惹かれていたからに違いない。『新島研究』第十九号(昭和三四年刊)に掲げられた先生の「新島先生と伊予青年」に明らかにされているように、先生の郷里宇和の青年たち、先生の長兄、類太郎はじめ、近縁の五名が東都遊学を志し、明治二一年春上京の途に上り、京都に一泊した。旅館主湯浅吉兵衛の、東京に行かなくても京都には同志社があり、ぜひ新島先生に会うようにとの勧めにより、彼らは寺町丸太町のお宅を訪ね、先生の言動に感激、上京をやめ、同志社入学に一決した。それ以来宇和の青年たち、末光先生の親戚だけでも数十名が同志社に学ぶようになったという。こうした関係から札幌時代も先生は、絶えず同志社と密接に連らなっていたのである。先生が新島襄の精神と信仰にもとづく同志社教育を生涯の使命とされたのも故なしとしない。

同志社来任の年、札幌独立教会の竹崎牧師も同志社大学宗教主任として来任。竹崎宗教主任の下に、新島襄の名を採ったヨセフ会と

いう学生の聖書研究会が開かれた。先生はこれを援け、大正十二年以来は宗教主任に代わってみずから毎週一日の研究會、毎月一回の新島先生墓前祈禱會を指導、同年中学長に転じたのちも、昭和一八年の戦時下に至るまで続けられた。このグループから真の同志社精神の具現者、キリスト教信仰に生き、キリスト教事業に直接間接たずさわる人々、あるいは信仰を社会生活に実践する多くの人々が輩出したことが注目される。

熊本バンドの一团が新島襄に接して、各分野に大きな働きをしたのと同様に、札幌バンドの流れを受けた末光先生は、新島襄に触発し、その信仰と教育精神の体現者として、大正デモクラシーが抑圧された十五年戦争の暗い時代にも、同志社の生命を守り続け、キリスト者としての良心をもって生き抜き、「良心を手腕に運用」する多くの有為の青年を育成されたのである。湯浅八郎元総長によると、末光先生はすでに若き日に「及ばずながら小新島・小クラークとなって神と人とに奉仕せんと決心したのである。それが私のために神が備え給うた使命の道だと信じた」と告白しておられたという。私に「新島襄の権化」

と映じたのも当然であったわけである。

#### 四、キリスト者の抵抗

昭和になると、軍国体制が全国を支配し、政治に、そして教育に軍部の介入が顕わになってきた。国民精神作興の名の下に政府は天皇神格の日本精神主義・神道イデオロギーを国民に強制し始めた。当初は比較的協調的であった配属将校も次第に本性を示し、キリスト教主義学校においては教育方針そのものの国家主義的転換を迫った。キリスト教の本山とも見られた同志社に対して、とくにはなはだしかったようである。そうした昭和四(一九二九)年、学内の右翼勢力はまず中島重教授らの追放に成功したが、これに対し予科YMCAが中心となって「全同志社を神へ」のスローガンの下に、学内諸キリスト教団体を糾合、翌年にかけて同志社精神の一大リヴァイヴアル運動を展開した。その委員の一人として私は、末光中学長が最も積極的に支援して下さったことを忘れることができない。その先生も学内の勢力のため窮地に立たされることとなった。かねてから慈父のご

とく慕っていた生徒有志は留任運動を起し、ストライキ計画を立てたが、屈服されてしまい、昭和六年四月、先生は高等女学部長に転任、実は左遷された。その前年に私は同志社を中退してしまったので、当時の先生の胸中には知る由もないが、悲痛のうちにも配属将校などにわずらわされることなく、なお自由によりキリスト教教育を行える高女部に期待をかけられたことと思われる。

しばらくは平穏であった。が、二年後には女専校長が高女部長を兼ねるということで、先生は教頭に格下げになった。このころと違うが、先生は「学校に行くのがつらい。が、イエス様の苦しみを思えば、これぐらいのことにへこたれてはおられん」と家族に洩らしたという。先生は「あなどられて人にすてられ」十字架への道を進んだキリストを仰いで、この世の名譽・地位に捉われることなく、ひたすら教育者として若い女生徒の薫育に情熱を注ぎ、朝拝説教は引き続き毎週三・四回は先生が担当、全教職員・生徒の敬愛をあつめていた。

その間にも時局は「非常時」から「超非常時」へと進んで行った。キリスト教学校への

官憲の圧迫はますます激化した。先生はたびたび憲兵の追求を受け、府庁に召喚された。しかし当時、昭和一六年春まで女子部教員であった私は、うかつにもそれを知らなかった。いつもと少しも変わらぬ温厚誠実な姿、明るい態度、そしていつもと変わらぬ、聖書にもとづいた福音の証に接していたからである。

太平洋戦争への突入後は、軍部政権によりキリスト教は敵性宗教と目され、同志社への圧迫はますます強化され、湯淺総長は退陣を余儀なくされた。そして同志社中学を中学校に、高等女学部を高等女学校に改組するよう文部当局からの指示が達せられた。これは校名の改称で済む問題ではない。当時の学校令によるということは、いっさいの宗教々育を廃止することを意味する。理事の中には「新島先生は愛国者であったから、今日の場合には政府の意に従われたらう」とか「月一回若王子墓参をすれば宗教教育の補いができよう」という人もあった。が、先生は断固反対した。そして祈った。先生は「新島先生の声をきく」(女子中学生徒会誌「れんが」第二号)に、「祈りの中に、はっきりと先生の声が聞え

た。同志社はキリスト教あつての同志社ですぞ。誰が何といつてもキリスト教を棄ててはなりませんぞ」と。かくの如くして、私共は最後まで頑張ったわけである」と記している。やがて府の学務課から始末書提出を求められたのに対して、「同志社は新島先生がキリスト教を徳育の基本として創立された。

その衣鉢をつぐ者として、これだけは死守する。政府が高等女学校と改称してもなお宗教教育を認めるなら、何時でも改称しよう」というような答申を出したため、当局の激怒を招き、ついに総長を通して先生は引退を要求されるに至った。「併し私として一番うれしかったことは、そうした中に新島先生の主義と立ち主義と倒れん我身なり、浪華の夢の世にしあらねば」の御歌声が、心の耳に絶えず響いたことであった」(同上)という。その間、督学官が幾度も来校して、いやがらせや詰問をしたというが、常に先生は憶するところなく、所信を披瀝し、あるいは幾度か府庁に召喚されて棄教を迫られたが、「殺されてもキリスト教を棄てません」と断固として答え、その役人はのちに「末光先生には本当に手こずった」と住谷総長に述べたところ

とである。こうして、キリストに活かされた新島義の権化は、クリスチャン教育者として、「せん方尽くれども望みを失わず」、信仰と愛ともって身を挺してその使命に遭進、同志社の生命を守り抜いたのであった。

終戦後、高女部校長に復職、昭和二二年新学制による女子中学校長、ついで女子高校長を兼任。同二六（一九五一）年三月、定年で退任、同時に他の公職も辞し、その後はマクリン幼稚園の経営と賀茂教会牧師として専念することとなった。

### 五、牧者末光信三

良き教育者末光信三はまた良き牧者であった。「我は植え、アポロは水灌げり。されど育てたるは神なり」（コリント前、三〇六）と、末光農学士は、神に全幅の信頼を献げて福音のために田畑を耕し、種を播き続けた。同志社中学から女子部にわたり、三十年間、日ごとの朝拝に福音を語り、また聖書科の授業を担当し、牧師に代わりヨセフ会を指導しただけでない。ミス・デントンを援けてマクリン幼稚園を設立、昭和二（一九二七）年現

在地に園舎ができる、四月以来、日曜学校を開き、日曜夕拝を始めた。京都教役者会はその世話を同志社教会に委任した関係から同志社教会下鴨集会所と称したが、説教その他ほとんどすべて先生がみずから担当した。私は京都（富小路）教会に属していたが、及ばずながら集会をお援けして、すべてキリスト者たるものは先生のように、その全生活を通してキリストを証すべきであると感銘を受けたものである。昭和十三年二月、近隣の参会者もようやく増加したので、日本組合教会京阪神連合開拓伝道部の援助の下に賀茂教会が設立された。始めは劍持牧師が来援、ついでヨセフ会出身の若い伝道師を迎えたが、先生は執事としてその働きを援け、説教も朝夕度々受け持たれていた。

昭和十六年、前述のようにキリスト教への圧迫は陰に陽に加えられた。そうした中に先生は若い神学校出身者にまじって、補教師の試験を受けられ、六月主任伝道師に就任。同二十年三月、五九才で牧師の按手礼を受け、戦争末期の暗黒の中に、信徒の群を守り、福音の燈火を燃やし続けた。時を得るも得ざるも福音を宣べ伝えずにはおられない先生の信

仰、躍如たるものがある。

まだまだ牧者としての先生を語り、珠玉の『寸言集』（四冊）やミス・デントンとのことなどを述べるべきであるが、も早、紙幅の余裕がない。ただ先生はこうしてひたすら召命のままにキリストの証人として、教育を通して、教会を通して神の栄光を顕わし、神を愛し、人を愛し、自由を愛し、人々への奉仕の生涯を送り、昭和四六（一九七一）年九月十六日、八五才をもって天上の人となった。墓は相国寺長得院にあり、墓石にはその筆になる「信望愛」の書が刻まれている。いささか蛇足であるが、キリストに生き、キリストにあって召天した先生が仏寺に埋葬されたのが、当たり前のように思われるから妙である。

昭和三年、中学卒。同五年、大学予科中退。  
昭和九一六年、高女部教諭・女専講師。  
現立教大学教授・文学博士

\* \* \*